公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団主催

第13回 環境シンポジウム

趣旨説明

総合地球環境学研究所 名誉教授 (財団環境事業選考委員長)

阿部 健一氏

地球環境を考える上で大量生産、大量消費、大量廃棄の問題は避けて通ることはできません。高度経済成長期において消費は美徳と言われていました。メーカーは意図的に製品の寿命を短く設計し、消費者に買い替えを促す戦略を取っていました。こうすることで社会が豊かになっていたように思います。コンビニエンスストアは消費者のニーズに細かく対応する中で、食品や弁当に賞味期限を設け、その中で大量廃棄が生じています。

かつて日本ではミミといえば溝にたまった泥や落ち葉でしたが、これらは肥料になりました。ごみ廃棄物の再利用という具体的な課題とともに、問題の根本にある「もの」をどのように扱うべきなのかという問いも大切です。今回のシンポジウムではこれから先、われわれはどうものとの向き合い、どのようなものづくりをすればいいのかを考えたいと思います。

基調講演③ 「もったいないを価値に変える 蒸留プラットフォーム構想」

小野 力氏

エシカル・スピリッツ株式会社
代表取締役CEO

私どもの会社は「もったいないを価値に変える」を掲げてクラフトジンを造っている2020年創業のスタートアップ企業です。クラフトジンはジュニパーベリー(杜松果)で香り付けした蒸留酒です。規格外の農作物を活用してクラフトジンにすることで、本来廃棄される運命にあった農作物を有効活用しています。これらの農作物は本来捨てられるべきものではなく、むしろステージの中心で輝くべきものだと考えています。

親戚が酒蔵を営んでいることもあってアルコール飲料にはなじみがありました。留学先の英国ロンドンでクラフトジンの魅力にはまり、事業としての大きな可能性を感じていたこともあってエシカル・スピリッツの創業に参画しました。現在、東京・蔵前で蒸留所とバー&ダイニングを運営しています。さまざまな事業パートナーとのコラボレーションを通じて共創型の蒸留プラットフォームを構築していきたいと考えています。

クラフトジンの材料として最初に着目したのが酒粕です。利用されていますが低い価値しかつけられていない酒粕を高付加価値化することで救いたいという思いがありました。代表ブランドとして開発したのが酒粕の豊富な香りを蒸留で引き出した「LAST」です。英語の「last」は「最後」と「続く」という2つの意味を兼ね備えており、日本酒造りの最後に生まれる粕を「ジンの素材として活用することで存続させていくというストーリーをブランド名に投影しています。

クラフトジンはジュニパーベリーで香り付けさえすれば原料に規定はなく、製品化する上で高い柔軟性と拡張性があります。蒸留酒にすることで賞味期限にしばられることなく素材を有効活用できます。香りを特徴とする蒸留酒を製造することで世界の「もったいない」を救うことを目指しています。

設立から5年で100種類以上の素材を使ってオリジナル製品を開発し、現在、19社と連携しています。開発実績として、未活用のカボチャハスク(豆皮)と規格外のパナナを素材にしたジン、ライブ会場でアーティストに送られたお祝い花を活用したジン、航空会社のラウンジから提供を受けたコーヒーかすを使用したジン、ホテルのオレンジジュースの搾りかすを活用したジンがあります。

また、特殊技術で樹木を粉砕してそのまま発酵蒸留して造った世界初の「ウッドスピリッツ」の開発にも取り組み、大阪・関西万博の期間中、りそなグループの支援を受けて大阪ヘルスケアパビリオンで展示しました。無駄なものはひとつもないという考えのもとで、大量消費社会の中でエシカルを軸に先を見据え、これまで存在していないおいしさと香りの探求に取り組んでいきたいと考えています。

クラフトジンの製造を通じて もったいない素材を有効活用 新しい発想で世界を救う

パネルディスカッション

大阪・関西万博が開催された2025年は民藝100年の節目の年 ものづくりの未来はいとおしさや愛着の観点から生まれる

阿部 民藝が100年を迎えた2025年、大阪では55年ぶりに万博が開催されました。未来に向けたものづくりを考える上で、最初は岡橋さんに大阪・関西万博におけるりそなの取り組みについてお話しいただきたいと思います。

岡橋 今回の万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は財団の活動内容と非常に親和性が高く、2019年以降毎年、万博をテーマにしたセミナーを開催するなど広報活動に協力してきました。会期中、りそなグループは、万博会場内の大阪ヘルスケアパビリオンに「りそなみらいカラー」と名付けた展示ゾーンを設け、中小企業、スタートアップ企業を対象に医療、都市、テクノロジーの4つのテーマに合わせて合計38展示43社の展示企画をサポートしました。万博の閉幕後も12月に出展企業を交えた商談会を開催するなど伴走支援を継続しています。

阿部 小野さん、鞍田さんにお聞きします。それぞれの事業内容を踏まえて民藝についてどのような印象を持ちましたか。

小野 酒造りは人の生活に寄り添って営まれてきたものということもあり、民藝には大きな親和性を感じました。

堤 民藝は自然と人の関わりの中で作られたものであると強く感じました。漆を採取する里山も自然そのものではなく人が関与しているからこそ成り立っており、だからこそ価値があるのだと実感することができました。

阿部 鞍田さんにお聞きしたいのですが、100年を迎えた民藝の活動は今後、何を目指していくべきでしょうか。

鞍田 民藝はものづくりと深く関わってきました。これまで民藝の活動は、衣食住の分野で多くの人があまり目を向けなかった当たり前すぎるものに、あえて光を当ててきました。これから先を考えた時、目を向けるべきは、ものではなく人だと思っています。民藝がものづくりの新しい可能性を喚起する引き金として生き続けてほしいという思いはありますが、人生が勝ち負けで語られてしまっている現代社会の中で見落とされている人たちにこそまなざしを向けていかなければならないと感じています。

阿部 人材について堤さん、小野さん、岡橋さんにお聞きします。人材を育成する上でこれまでとは違う視点で考えていることはありますか。

堤 漆の精製に取り組む一方で漆工芸にも取り組める環境を作っています。漆を通じて人と自然のつながりを作り直す取り組みも進めています。漆そのものの理解を深めた上でものづくりの技術を受け継ぐ若い人材を支援する仕組みを構築していきたいと考えています。

小野 会社のメンバーの平均年齢が20代後半と若いこともあり、成長できる機会を積極的に提供するようにしています。価値を見いだすことで素材をフェアに評価することに愚直であってほしいと思っています。スタートアップ企業は出資者に目を向けなければならない宿命を背負っていますが、収益を重視する一方で理念もしっかりと守っていくつもりです。

岡橋 金融機関は、企業に融資をする際、製品や技術だけでなく経営者本人にも目を向けて技術や経営に対する考え方、従業員への思いなど総合的に評価しています。企業と共に歩む姿勢を大切にする人材を育てることを大事にしています。

阿部 皆さんにお聞きします。今の世の中のものづくりについて変えてはいけないもの、変えていかなければならないものについてお話しください。

鞍田 聞くという姿勢が何よりも大事と思います。今の世の中は、発信することが良いとされていますが、聞くことがなければ意味を成しません。民藝も自然の声や人の声を聞くことから、そこに存在意義があるのだと思っています。

堤 漆は最強の樹脂になる可能性を持っています。今後、漆の植林数が増える可能性はありますが、漆や漆工品が人と自然のバランスによって成り立っていることを決して忘れてはならないと思います。

小野 今の世の中は消費者主体で動いていますが、だからこそ作り手がこだわりを失うことがあってはならないと肝に銘じています。その一方で、販売方法は柔軟に変えていかなければならないと感じています。

岡橋 環境を守るために自然とのバランスを重視するという軸を守る一方、新しい価値を生み出すために発想を常に変えていくことがこれまで以上に大切になると思います。

阿部 今回のシンポジウムを通じて「いとおしさ」や「愛着」が環境と負荷をかけないものづくりを実現していく上で大きな要素になることを実感できました。本日はありがとうございました。

主催 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団
共催 大阪府、大阪市、関西経済連合会(アジアビジネス創出プラットフォーム)、大阪商工会議所、大阪産業局
後援 日本貿易振興機構(ジェトロ)大阪本部、JICA関西、関西SDGsプラットフォーム、産經新聞大阪本社、りそな銀行、関西みらい銀行、みなと銀行、りそな総合研究所

第13回環境シンポジウムの模様は、りそなアジア・オセアニア財団YouTubeチャンネルでご覧になれます。

<企画・制作>産経新聞社メディアビジネス局